

中学校の家庭科担当教員による 食に関する指導についての意識と実態

磯部 由香¹⁾・村上 陽子²⁾・杉山 綾子³⁾・長野 宏子⁴⁾

中学校家庭科の食物分野を担当している教員を対象に、食に関する指導に対する意識と実態について調査を行った。食に関する指導の全体計画の主たる作成者として関わっている教員は、30%程度と少なかった。文部科学省が示している食に関する指導の6つの目標のうち、「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品選択能力」については、ほとんどの教員が家庭科の学習目標と重なっているととらえ、授業で扱っていた。これと比較して「感謝の心」、「社会性」、「食文化」については、家庭科の学習目標と重なっているととらえる人が、やや少なく、授業での扱う程度も低かった。

キーワード：食に関する指導・中学校・家庭科

1. 目的

現在、日本では、食を大切にする心の欠如、栄養摂取のバランスのくずれによる健康障害、食文化の伝承や食に対する感謝の念の衰退など、食をめぐる数多くの課題が生じており、本来、食が持っている様々な機能が十分に果たされない状態にある¹⁾。そこで、これを国民的課題としてとらえ、家庭だけではなく、幼稚園・保育所、学校および地域において、食育を推進していこうとする動きがある²⁾。中学校における食に関する指導については、技術・家庭科（以下、家庭科）の食物分野がその主な役割を担っていると考えられる。そこで、中学校の家庭科における食に関する指導についての実態を調べるとともに、食に関する指導の目標を家庭科担当教員がどのようにとらえ、位置づけているかについても併せて調査を行った。

2. 調査の概要

三重県、静岡県および岐阜県の中学校で家庭科を担当する教員を調査対象とした。平成19年10月～平成20年3月に、質問紙調査により実施した。対象者の年齢、家庭科教員免許状の所有状況および給食実施状況について表1～3に示した。給食の実施状況については、県による違いがみられ、静岡、岐阜ではほぼ100%実施されているのに対し、三重では実施が3割であった。

アンケートでは、食に関する指導の全体計画の作成への関与、文部科学省により作成された「食に関する指導

の手引き³⁾に示されている食に関する指導の6つの目標と中学校家庭科食物分野の目標⁴⁾との重なり及び授業での扱いについて質問した。また、中学校の食に関する指導における家庭科教育の果たす役割について自由記述での回答を得た。

表1 対象者の年齢

	人	%
20代	35	13.7
30代	45	17.6
40代	111	43.3
50代	57	22.3
60代	5	1.9
無回答	3	1.2
合計	256	100

表2 家庭科教員免許状の所有状況

	人	%
あり	212	82.8
なし	42	16.4
無回答	2	0.8
合計	256	100

表3 給食の実施状況

	三重		岐阜		静岡		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
あり	17	32.1	65	95.6	130	96.3	212	82.8
なし	36	67.9	1	1.5	4	3.0	41	16.0
無回答	0	0.0	2	2.9	1	0.7	3	1.2

1) 三重大学教育学部

2) 静岡大学教育学部

3) 岐阜大学教育学部附属中学校

4) 岐阜大学教育学部

3. 結果

(1) 食に関する指導の全体計画の作成への関与

食育基本法を運用していくために作成された食育推進基本計画では、小・中学校において、学校ごとに「食に関する指導に係る全体計画」を作成し、学校全体での取り組みを推進することが示されている³⁾。そこで、勤務校での全体計画の作成への関与の仕方についてたずねた。

勤務校での全体計画の作成を把握している人は256人中108人と約40%であった。調査を実施した平成19年度の時点では食に関する指導の推進がまだ学校全体に浸透していなかったことを示す結果と推察される。また、全体計画の作成を把握している人の内訳を表4に示したが、主たる作成者として関与している人はわずかに約30%であり、主たる作成者ではないが作成グループのメンバーである人が約40%、参画していない人が約30%であった。アンケート調査全体の把握していない人を入れると、さらに割合は下がる。今後は、家庭科の学習内容から考えても、家庭科担当教員が必ず食に関する指導の全体計画に参画し、できれば主たる作成者として学校全体の指導を推進していく役割を担うことが期待される。

表4 食に関する指導の全体計画の作成へのかかわり方

	人	%
主たる作成者	33	30.6
作成グループのメンバー	43	39.8
参画していない	32	29.6
合計	108	100

(2) 食に関する指導と家庭科における食物分野の学習

平成19年3月に文部科学省から出された「食に関する指導の手引」は、小・中学校、特別支援学校において食に関する指導を推進するための手引きである。この中で、6つの項目が食に関する指導の目標として挙げられている。その内容は下記のとおりである。

- ・食事の重要性：食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する
- ・心身の健康：心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付ける
- ・食品を選択する能力：正しい知識・情報に基づいて、食品の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける
- ・感謝の心：食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ
- ・社会性：食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける
- ・食文化：各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等

を理解し、尊重する心をもつ

上記の目標を果たすためには、学校全体の食に関する指導の年間計画を作成し、学校給食を中心として、様々な科目、総合的な学習の時間、特別活動および学校行事のなかで、系統的、総合的に食に関する指導に取り組むことが望ましいとされている。しかし、今回のアンケート結果によると、多くの学校では、家庭科や保健体育以外の授業では、実施されていないのが現状であり、先に述べた全体計画作成の認識の程度からも、学校全体での取り組みの難しさが推察される。また、給食の未実施校があることも、中学校での食に関する指導の困難さを増長していると思われる。今後、学校給食を中心とした取り組みもさらに検討する必要がある。

以上のことから考えて、家庭科は中学校における食に関する指導において、非常に重要な役割を果たすといえる。つまり、中学校で食に関する指導を進めていくためには、家庭科の食物分野において、本来、家庭科の果たすべき目標に加えて、食に関する指導の視点を盛り込む必要があると考えられる。そこで、上記の「食に関する指導の目標」と「家庭科の食物分野の学習の目標」の重なりについて、家庭科を担当する教諭にたずねた。図1に示すとおり、「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品選択能力」の項目については、「かなり重なる」と「やや重なる」を合わせて90%以上であり、ほぼ家庭科の目標と一致しているといえる。これと比較して、「感謝の心」、「社会性」、「食文化」については「あまり重ならない」または「ほとんど重ならない」と考える教員も約20%程度、存在していた。

次に、担当している家庭科の授業における「6つの内容」の扱い方についてたずねた。図2に示すとおり、「目標」の重なりと同じような傾向がみられた。「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品選択能力」の項目については、ほとんどの人が授業で扱っていた。これに対して、「感謝の心」、「社会性」、「食文化」については、20~30%の人が「あまり扱っていない」と回答し、「ほとんど

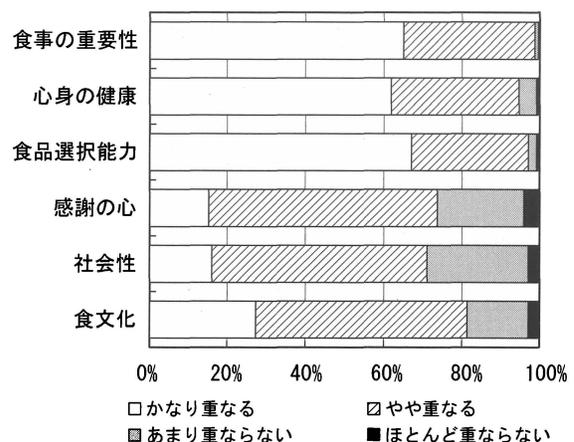


図1 食に関する指導の目標と家庭科の学習目標との重なり

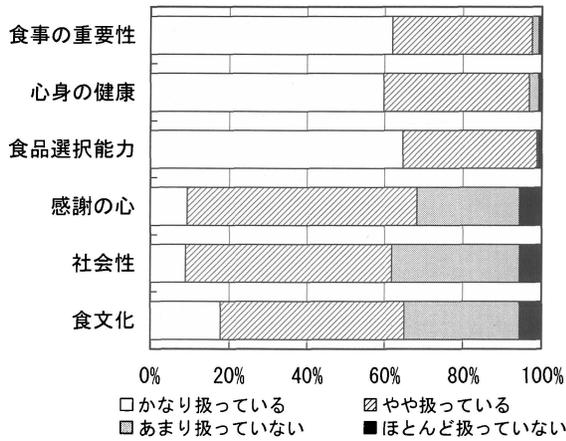


図2 家庭科での扱い

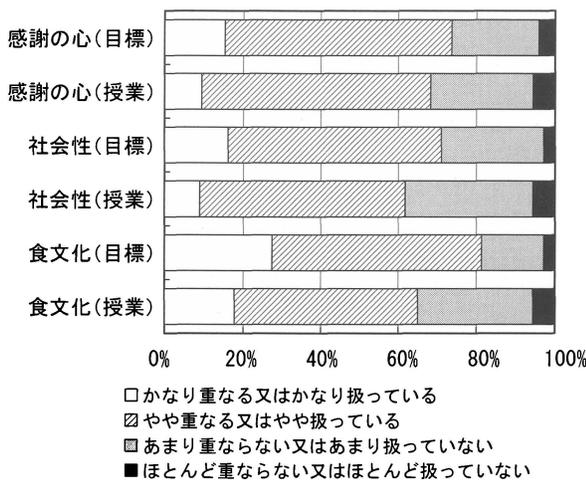


図3 目標の重なりと授業での扱いの比較

扱っていない」と回答する人は10%近くいた。

授業において扱いの少ない「感謝の心」、「社会性」、「食文化」の3つの項目について、目標の重なりと授業での扱いを比較した結果を図3に示した。家庭科の目標の重なりがあるととらえていても、実際に授業で扱う程度は、それよりもやや軽くなっていると見受けられた。このことは授業で扱いたいと思っても授業時間等の制約を受けているためと考えられる。

(3) 中学校の食に関する指導における家庭科教育の果たす役割

「中学校の食に関する指導における家庭科教育の果たす役割についてどう考えますか」という質問に対して自由記述での回答を得た。その中の一部を紹介する。

まずは、家庭科における食に関する重要性についての記述を挙げる。

- ・人間が生活を営む上で食に関することはとても重要な事柄である。生活そのものを学習内容とする家庭科教育にとって、これまでもこれからもとても大切な内容であり、生徒の幸せな人生の基礎となる欠かせない学習として大切にしていきたい。
- ・中学校に於いては、時間数、内容とも、家庭科が食教育の中心を担っている。生徒の心身の健康、生活実態から、望ましい食生活までが、週に一回とはいえ、半年間継続して学習でき、知識と実習(実践)の両面から学べる。日常生活へ反映しやすい内容を扱っているので、生徒の興味・関心をひきやすい。
- ・食育に関わっては家庭生活や食生活との関連が深く、食育の内容はほぼ系統的に指導している。科学的根拠を持って、発達を考えて指導できる。

上記のように、食に関する指導を重要と考え、生徒の心身の健康や生活実態を継続的にとらえて指導する実態を考えると、家庭科教育が担う役割は非常に重要でかつ大きいととらえられていた。しかし、下記のように、指導のため授業時間数が少ないことに対する不満の意見も多かった。

- ・食に関する指導は、以前から家庭科教育の中で扱ってきているので、中学校において、家庭科教師が中心となって進めていくべきだと考えている。家庭科の授業時数が年々減少している一方、食育の重要性が叫ばれていることに矛盾を感じる。
- ・系統立てた指導を、家庭科教育で行っている。したがって、食に対し、家庭科の占める役割は大きいと思う。家庭科の授業が減らされて久しいが、食の重要性を指摘するのであれば、家庭科の授業数確保に目を向けるべきだと考える。

次に、家庭科教育における具体的な目標な内容についての記述も多かった。

- ・食の大切さに気づかせたい。
- ・自分の食生活を振り返らせる機会である。
- ・自分の生活に生かす
- ・栄養・食品選択・食の安全性についての知識を身につける
- ・調理などの技能を身につける。
- ・心の健康を育てる
- ・会食を通して人とかかわりを持つ
- ・命・生きることの大切さを考える
- ・家族や他の人へ感謝する

このように、家庭科教育の食物分野で中心的に扱われてきた内容だけでなく、心、社会性、感謝の念を育てる内容についての少数意見も見られた。

そのほか、連携に関わる記述も見られた。

- 日々の生活の基本を作るうえで食が与える影響が大きいので、家庭科はもちろん学校全体の役割は大きいと感じる。
- 真に生徒に力をつけるためには他教科や特別活動の時間との連携が必要と考えますが、学校現場が食に関する指導を多大に任せられることには疑問を感じます。
- 食教育は大切ですが、中学校で教科以外の時間で設定するのは難しく、家庭科教育の果たす役割は大きいと考えている。
- 他教科での指導はあまり期待できない。給食の時間、栄養職員が年3回（各クラス）の計画で食を前に指導して下さる。

このように、給食指導や他教科、他の教員との連携の重要性についても述べられており、学校全体の取り組みを重要ととらえているが、困難に感じている様子も伺えた。

4. さいごに

食に関する指導についてのアンケート結果より、家庭科担当教員は食に関する指導を重要なものとしてとらえていることが明らかとなった。文部科学省が提示している食に関する指導の6つの目標のうち、「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品選択能力」については、教員が特に食に関する指導を意識していなくても、家庭科の学習目標を達成するように授業を実践していれば、食に関する指導の目標も既に果たしており、またこれからも果たせると考えられる。しかし、授業で扱う割合が低かった

「感謝の心」、「社会性」、「食文化」については、家庭科の目標とあまり重ならないという考え方もみられた。学校における食に関する指導を様々な角度から実施するためには、この3項目についても、目標としてとらえる必要があると考えられる。そのためには、家庭科教員が家庭科の中でこの3項目を意識して取り組むことが大切である。特に、「食文化」については、今回の学習指導要領の改訂⁶⁾において、「地域の食材を生かした調理、地域の食文化」の項目が追加されており、郷土料理などの地域の食文化や地域の食材を扱うなど、家庭科の学習内容としても、見直すべき分野であろう。特別活動の時間を利用した学校給食を通じた指導や栄養教諭との連携、地域との連携も望まれている。

また、他の教員を巻き込み、連携して他教科や学級活動、行事などを通して学校全体での取り組みにするとという方策もある。その場合、家庭科担当教員がその要になり、他教科の教員にも食の重要性に対する認識を広め、推進していくことが望まれる。中学校における食に関する指導については、家庭科の授業時数、他教員・他教科との連携の難しさなど、課題は多いが、家庭科の重要な役割を認識し、家庭科担当教諭が食に関する指導を推進していくことが期待される。

参考文献

1. 「食生活論」：福田靖子ら、朝倉書店、2006.
2. 「食に関する指導参考資料」：文部科学省、東山書房、2000.
3. 「食に関する指導の手引き」：文部科学省、2007.
4. 「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説一技術・家庭編」：文部省、東京書籍、1999.
5. 食育推進基本計画：内閣府、2006
6. 「学習指導要領改訂のポイント」：文部科学省ホームページ、2008.